

みんなと歩んできたこの3ヶ月。見えない次元から与えられたこの出会いに感謝しつつ、そこにこめられた意味を考えてみたいと思います。

個人的な私の体験から、今回の話は始まります。私は2年前にうつ病で倒れました。何ヶ月も休んだ後復帰しましたが、自分が教壇に立つというイメージはその後もなかなか持てませんでした。「そのイメージが持てるまでは教壇に立つてはいけない」と主治医から念を押されていました。復帰はしても苦しさは続きます。そんな中で、私の授業の模索が続きました。

今振り返れば、断崖絶壁を歩んでいるような苦しい日々でした。でもいろいろの出会いがありました。仮説実験授業の板倉先生という方と出会うこともできました。それは衝撃でした。小学生たちは心の底から楽しんで授業を受けています。私もその仮説実験授業というのを受けてみましたが、これが本当におもしろいのです。これまで私が持っていた授業感は砕かれました。実は、毎回授業の最後書いてもらってる感想シートというのは、仮説実験授業から学んだものです。ただ、仮説実験授業はおもに理科や社会に関するものが中心で、数学に関するものはまだあまり開発されていないのです。そのため、まだまだ授業のイメージは見えません。私の模索は続きます。

もう一つ、奇跡的な出会いがありました。私が病院へ行った帰りのことです。バスを待つ間本屋に立ち寄ったところ、たまたま私が大学時代に教えてもらった恩師が出された本を見つけました。すぐに買いました。もうずっと前に学んだことなので、有名な定理以外は忘れていました。でも、読んでみると面白かったです。机の上に置いていつもぱらぱらとめくっていました。なんということでしょう。そうすると心が癒されるのです。

私は25年ぶりにその恩師に手紙を書いて、感動を伝えました。ある日ポストの中に

恩師からのハガキが入っていました。私はこのハガキをいつも肌身離さず持ち歩いては読み返しました。皆さんに紹介したいと思います。

拝復 お返事がたいへん遅くなりすみません。

河村君のことはまだちゃんと覚えています。もう「君」では失礼と思いますが、学生のとときのイメージしかなかったのでご勘弁下さい。拙著を読んで下さったということにかなり驚きました。一つにはあの本は大学生協などを除き、一般書店ではほとんど流通していないのに河村君の目に止まったということが希有なことですし、さらには、卒業後27年も経つのにあの本を「面白い」と感じられることです。また、私の当時のつたない講義にもかかわらず、興味を持って下さり、ノートを今に至るまで保存されていたことなど、教員冥利に尽きる話で、まことに有り難く思います。

拙著に今の言葉で言うと「癒し効果」まで感じられるというお話は、ご自分の青春時代への追憶の力が大きいとは思いますが、数学の純粋な世界というものが我々に与えてくれるものでもあるでしょう。数学の世界に熱い、現実のこの世界をうまく乗り切る力を得られればたいへん結構なことと思います。

最後になりましたが、まだまだ長い将来を持つ河村君が、お元気に過ごされますようお祈り致します。

これを読んだとき私は改めて奇跡的な出会いだったのだと思いました。そして恩師が書いてくださった、「数学の純粋な世界というものが我々に与えてくれるもの（癒し）もあるでしょう。」という言葉が強く心に積み込みました。

うつ病というのは、興味・関心・意欲が全く起こらなくなってしまう病気です。動けなくなります。ベッドに横になったまま天井を見上げてじっとしているしかできなくなります。その時の心の中は焦げ付くように苦しいのです。テレビの映像や音楽さえもが苦しいのです。

ところが、数学や授業というものに、うつ病をさえも癒していく力がある。その中心的なキーワードは「興味・関心・意欲」である。

こうして、このことを発見した私の中で、授業に対するイメージが、新たに下りてくるようになりました。(続く)